

2014/3/1

しろひげ@Kurobane です。

3月になりました。

冬の祭典が終わり、この国はほどよく厳かな、晴れの季節になる、と書き始めたいところですが、  
まだまだ2月（冬）の名残りに揺れています。

私が冬のオリンピックというものをはじめて意識するようになったのが、1956年のことでした。

コルティナダンペッツォという舌をかみそうな開催地をようやく言えるようになったと思ったら、  
んどは猪谷千春さんが日本人で初めてメダルをとったという知らせが入って来ました。

新聞を食い入るように読んでいた9歳の坊主も、1972年の札幌大会ではトワ・エ・モアのテーマ曲を口ずさみながらの卒業試験真っ最中でした。

このテーマ曲の作詞者が、やがて専門を同じにするの某医科大学教授であり、その部下で  
ある作家の渡辺淳一と、6年後に異国で会うことになるとは……人生とはかくも奇しくも  
面白いものです。

冬でよし、夏でよしの世界の祭典ですが、ソチの地はとりわけ、私たちに勝利の輝き以上に、  
good loser たちの美しい物語を残してくれました。

そんなアスリートたちに刺激を受けたのでしょうか、

暴れん坊の冬将軍は、日本列島を滑降したり、回転したり、はては大回転までして私  
たちを翻弄しました。

<いざさらば 雪見にころぶ ところまで> と江戸の芭蕉は雪で童心に帰ったそうです  
が、雪国に住む一茶の句

<雪ちるやおどけも言えぬ信濃空> に共感した人々が例年になく多かったはずですよ。

あの大地震から3年目の春を迎えます。

冬から春へと少しの遅滞もなく移っていく天地の巡りのなかで、2月の背中を見送りな  
がら、鎮魂と希望の3月を迎えます。

記憶を風化させることなく、生かされている自分たちの役割を改めて考える日々にした  
いものです。